

今回の応募作は全国から132編。最終的な候補作として3名の選考委員の手に届けられたのは8作品。慎重な審議の結果、第一席に「猫投祭（マユーナギー）」（野原誠喜）、第二席に「レモン色の月」（仲間望）、佳作に「島の音」（中里咲耶）にすることで見解が一致した。

第一席の「猫投祭（マユーナギー）」は、架空の島「多嘉良島」に伝わる架空の伝統行事「猫投祭」を作り上げた作品だ。リアリティがあり、思わず今日にもこの行事が行われているかのような錯覚に陥るほどの快作である。オリジナリティがあり、ネット社会で使用されるSNSの恐怖をも反映させ、また「猫投祭」を止めにアメリカの動物愛護団体から来島するミス・トンプソンをも登場させ、島を拠点にしてインタナショナルな世界を視野に入れた深く広い作品にした。主人公で写真家を目指す池間瑠璃子の物語、来島するミス・トンプソンの物語、そして神女宮国のおばあや村人の様子が手際よく処理されて立ち上がってくる。作品上で交わされる論議もよく噛み合っていて違和感がなくドラマチックな作品である。作者の想像力と作品の構成力に感服した。

第二席の「レモン色の月」は北の島、北海道の島の物語だ。登場人物はほぼ二人でまもなく80歳を迎える母喜代と、5年後の定年を前に看護師を辞して帰郷した娘美咲である。それだけに母娘の心理描写が丁寧で、この微細な描写で物語が成立することを示した作品でもある。魯迅の作品「故郷」の帰郷の場面を冒頭部に援用しながら、若いころの母の秘密が明らかになっていく。他者を愛することのはかなさと美しさを浮かび上がらせて普遍的なドラマにした。さりげなく挿入される戦死した伯父や、祖父との思い出も効果的だ。エンディングに、母に母以外の一人の人間としての人格を発見し、また「心」という曖昧なものも確かかなものとする発見にも好感が持てる。さらに新鮮な比喩表現も随所に見られ安定した文章力と併せて記憶に残る作品になった。

佳作の「島の音」は二人の少年の交流を描いた作品である。一人は島の民宿の息子潮で、もう一人は島にやって来ていた常連客の孫、史音である。二人は音楽が好きでそれぞれフルトとバイオリンを奏するが、「上手な音より豊かな音」を発見した二人の成長譚としても読める。島の海風が吹き渡る作品世界にはアオウミガメも登場する。ファンタジックな作品であるが、展開にも無

理のないよく推敲された作品であった。

最終的な候補作は、他に「不死王の島」「朝光の畑」「神歌由来」「嘆きの森」「家出は舟で」の作品であった。作品は力強く、ユニークな発想には好感が持てたが、今一步入選作には及ばなかった。